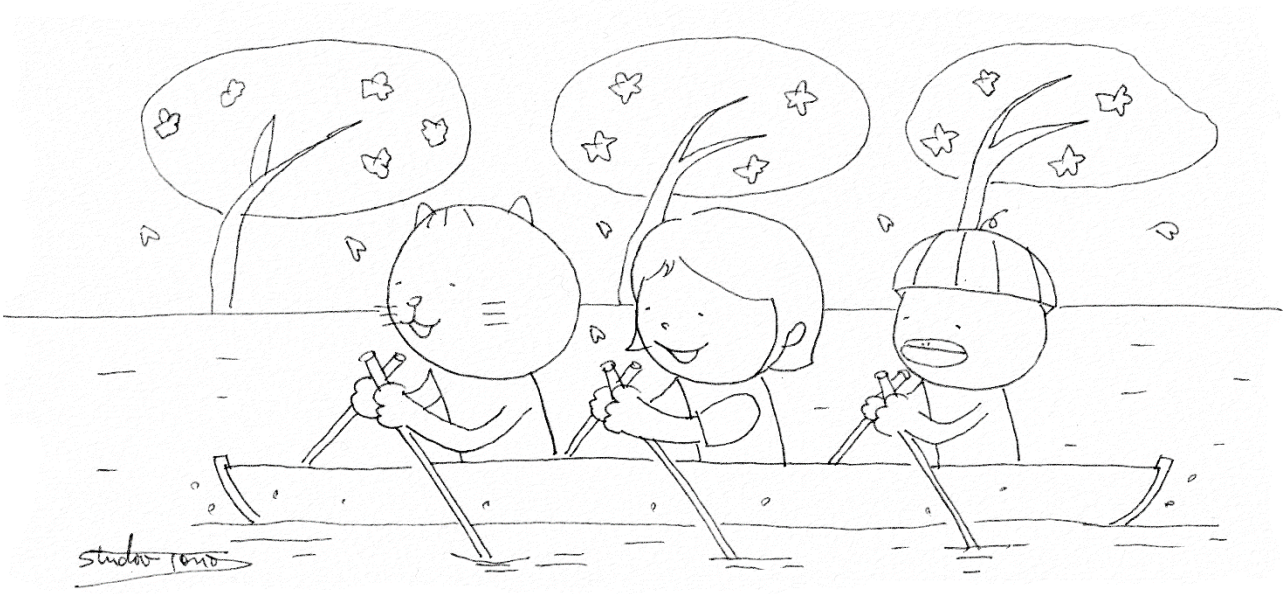
第28号　2024.3

ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りぃぶるBOOKプラス～



閉店時間

有吉佐和子 著　河出書房新社　2022年（K：エッセイ・文学）

有吉佐和子（1931-1984）は和歌山県生まれの女流作家、劇作家、演出家である。紀州三部作「紀ノ川」「有田川」「日高川」や「華岡青洲の妻」などの歴史ものから、「恍惚の人」や「複合汚染」など社会問題をあつかう作品まで話題作を発表していたが、53才で急死した。没後40年にあたり、有吉本の出版が相次いでいて、本書は1963（昭和38）年に講談社から刊行されたものの復刻文庫版である。

東京新宿にある架空の百貨店を舞台に、高卒で就職した3人の女性の仕事や恋愛模様を描いたものである。今ではないエレベーターガール、ストライキ、公衆電話などの昭和の状況や業界隠語などでてきて懐かしく思う部分もある。また、呉服部勤務の女性は、週1のテープライブラリーのボランティアや着物の知識をつけて仕事に目覚めて行くというのは、有吉自身の体験談をいれ、熱がはいっているように思える。有吉作品は大作が多いが、当時の女性模様を描いていて飽きずに面白く読める作品だと思う。（か）

きときと夫婦旅

椰月美智子 著　双葉社　2022 年（K：エッセイ・文学）

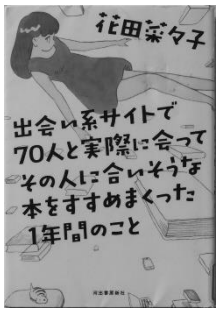
一人息子の中学3年生の昴が家出をします。行先は、友人がいる氷見市だと判明します。結婚生活の様々なすれ違いのため冷戦状態の40代後半の夫婦が、昴を迎えに金曜日に東京を出発します。ところが「日曜日まで帰りたくない」と昴から連絡が入ります。仕方なく夫婦で日曜日まで富山県内を旅行することになりました。旅先で出会う人や出来事をきっかけに、夫婦は互いのことを見つめ直します。

物語のラストで昴が「親がぎくしゃくしているから、やりづらくてしょうがないっての。ほんっとダサいわ」と夫婦に言います。母親は、昴を追いかける形で夫婦そろって富山に行くことになったのは、夫婦に会話をさせるために昴が計画したものだった可能性があると考えます。

この物語は、夫婦や親子の問題だけではなく、富山県の名所・名物、そして鉄道情報も詳細に描かれています（富山県は有数の鉄軌道王国です）。　（Ma）

出会い系サイトで７０人と実際に会ってその人に合いそうな本をすすめまくった１年間のこと

花田菜々子 著　河出書房新社　2018 年（K：エッセイ・文学）



本の題名を見て、出会い系サイト？と怪しいイメージを抱き、読まず嫌いしている方もいるのではないでしょうか？この本は、「ヴィレッジヴァンガード」という本屋の元店長だった著者が、'別居'という人生のターニングポイントに「知らない人と会って30分だけ話してみる」というコンセプトのアプリに興味を持ち、新しい人と出会っていくというノンフィクション・エッセイ小説です。そのサイトで、ただ人に会うだけではなく30分会話した後に、おすすめ本を紹介します。私は著者がどんな人に出会い、どんな本を紹介するのか興味が湧きこの本を手に取りました。読んでみると、会った人に本を紹介するという枠を超えて、人に会うことがこれほどひとりの人生に影響するのか！と思わされる作品でした。新しい人と出会うことは決して楽なことばかりではないけれど、想像を超える未来に導いてくれる。勇気を出して一歩踏み出せば決して無駄なことはない、と思える1冊です。　（めい）

女歌の百年

道浦母都子 著　岩波書店　2002 年（Ｉ：女性史）

女歌といっても歌謡曲ではなく短歌。著者は1947年和歌山市生まれの歌人。全学連の闘士として活動し「ガス弾の匂い残れる黒髪を洗い梳かして君に逢いにゆく」といった強烈な歌もある。

与謝野晶子の「みだれ髪」から俵万智の「サラダ記念日」まで百年にわたる戦前戦後の女性歌人の短歌と人物像を12章にわたり紹介している。NHKで放送された内容をコンパクトにまとめているので短歌や歌人の紹介がわかりやすく、日頃短歌にあまり縁のない方にもスンナリ読める。前述の二人のほか柳原白蓮とか岡本かの子のように有名な歌人から入っても差し支えない。

「和歌」山県であるから本県はもっと和歌（短歌）が盛んであってもよいものだが、残念ながらもう一つ。例えば「NHK短歌」11月号に入選しているのは1800首中わずか1首（ちなみに俳句は1800句中6句）。もっともっとみなさんに短歌に関心を持っていただくためにも一読をおススメしたい。　（紀生）

エヴリシング・フロウズ

津村記久子 著　文春文庫　2014 年（K：エッセイ・文学）

たんに、題名の「フロウズ」の意味を知りたい思いと、表紙絵が頼りない下書きのような線で、てんでんばらばらに向いた中学生らしい男女の群れだったので、子供向けかもと軽い気持ちで読み始めた。

ところがさにあらず、大阪の某公立中学校を舞台に、3年生たちの最後の1年間の交友関係の喜怒哀楽が濃密に描かれていた。

4月、クラス分けの掲示板の前で、主人公ヒロシが、新しいクラスで「誰かが自分を見つけて、自分も誰かを見つける」だろうと明日へ思いを馳せるところから物語は始まる。初夏、高校受験へ向けての面談、秋の文化祭、やがて卒業式といった恒例の行事を軸に、少年ヒロシを中心に男女6人の友情、交流離反のドラマが展開されていく。

生徒同士の暴力事件一件以外大きなことはなく、毎日の中3生一人一人の波あり風あり、時に流され、時に乗り越える生活を描くのに、その内心よりも一挙一動すべてを隙なく叙述するような文体なので、厚めの一冊になっているように思った。

久しく忘れていた青春時代を甦らせてくれた一冊だった。ちなみに「フロウズ」の意味は巻末の最終行にある。　（大空）

私はいま自由なの？　男女平等世界一の国ノルウェーが直面した現実

リン・スタルスベルグ 著　枇谷玲子 訳　柏書房　2021 年（A：フェミニズム）

ノルウェーと言えば、世界経済フォーラムが発表するジェンダーギャップ指数2023で世界第2位を誇る男女平等先進国である。ところが、本書を読めば、これは日本の事を言っているのではないかと疑いたくなるような現実や疲弊感が伝わってくる。

本書は5章から構成されている。第1章『「仕事と家庭の両立」という難問』では、仕事と子育ての両立がギリギリの生活である現実を示す。第2章『70年代の神話と社会変革の夢』では、女性解放を主導してきたフェミニズムについて振り返る。第3章『仕事をすれば自由を得られる？』では、労働時間の長さが問題であることを指摘する。第4章『キャリア・フェミニズムと市場の力学』では、男女平等志向のフェミニズムに対する課題提起を行う。第5章『「可能性の時代」は続く』では、かつてフェミニズムが目指したものと、今自分たちが望んでいるものが同じなのか自問する。

男女平等と労働と子育てが本書の大きなテーマとなっている。著者は社会学修士号を持つノルウェー生まれのジャーナリスト。彼女は「家庭を犠牲にしない働き方をするために安定した仕事を辞めた」という。男女平等の国ノルウェーでも、仕事と家庭の両立はうまくいっていない。私たちは、日本の男女平等は遅れているという情報ばかりを日頃から受け取り続けている一方で、外国の現状に関してはあまり情報がない。そういう意味でも本書は貴重な一冊である。　（O.S）

早く絶版になってほしい#駄言辞典

日経 xwoman・小田舞子（日経 xwoman 編集部）編　日経 BP　2021 年（K：エッセイ・文学）

本書のタイトルにある「駄言」とは、古いステレオタイプによって生まれたひどい発言を意味しており、2020年に日経新聞紙面広告を通じて公募されたものだそうです。読んでいくと、「君は女の子なのに仕事ができるね。」のような実際の「駄言」があり、誰しも共感できるものがあると思います。本書では、このように集まった「駄言」を6つのカテゴリーに分けて掲載し、解説を加えています。また、著名人の「駄言」にまつわるインタビューも紹介されています。そして、「駄言」との向き合い方が考察されています。私は特に、「自分が『駄言』を言わないためにはどうするべきか」という視点で本書を興味深く読みました。私達一人ひとりの「当たり前」の違いが「駄言」の背景にあることがよく分かりました。また、今がどのような時代なのか、何が重要視されているのかを絶えず勉強する事が必要なのだと分かります。世の中から「駄言」を無くすための努力の方法が見えてくる本です。ぜひ読んでみて下さい。　（A.T.）

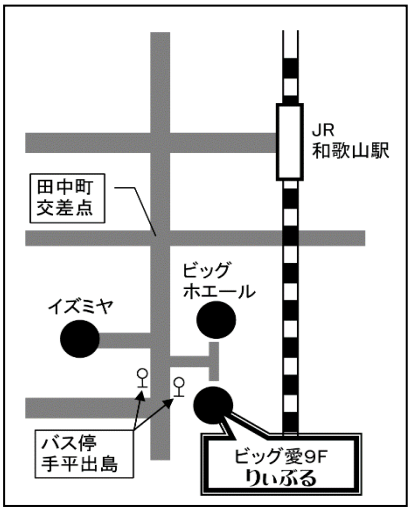
幸せはあなたの心が決める

渡辺和子 著　ＰＨＰ研究所　2015 年（E：こころ・癒やし）

著者は30代半ばでノートルダム清心女子大学の学長に就任し、平成25年12月に亡くなる（享年89歳）直前まで教壇に立ち続けた。

ある小学校1年生の宿題が、「誰かに抱っこしてもらう」ことだった。翌日、抱っこしてもらわなかった子を、先生が一人ひとり抱っこしてやったという新聞記事を見て、著者は大学を出て教職につく一人ひとりが、こんな先生になってほしいと書いている。これを読んだ私は、幼児に乳首をあてがいながら、一心にメールを打っている母親に育てられた幼児は、満腹はしても心の満足は味わっていないのではないか。乳を含ませながら幼児を見つめ、ほほえみかける母親を育てたいと思った。

他に、「どんな時も自分を愛し見捨てることなく、ほほえみを忘れず他の人も大切にする」「世の中うまくいかなくても当たり前。うまくいったら感謝する。」等の言葉があふれています。強くしなやかに生きたシスターの言葉に気持ちが安らぎます。　（はんちゃん）



この本 よんだ？　第 28 号　（2024 年 3 月発行）
◇企画・発行　りぃぶるぷらす
◇協力　和歌山県男女共同参画センター“りぃぶる”

【編集後記】 “りぃぶる”は設立25周年を迎え、タレント・エッセイストの小島慶子さんが記念講演を行いました。「女子アナ」時代に感じた違和感の話などを交えながらの楽しいお話でした。「間違ったことをしていてもこれから変えればいい」と話されたことが印象に残りました。ちなみに「女子アナ」はなくなって欲しい言葉ということでした。

★あなたも書評を書いてみませんか？ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。　E-mail　libreplus@yahoo.co.jp